



日本科学者会議 (JSA) 滋賀支部
NEWS LETTER

2022年8月8日発行 第82号

事務局長 小島 彬

TEL/FAX 077-589-3724

Email : akrkojima@ybb.ne.jp

戦争文学について

—百田尚樹『永遠の0』にも触れて

個人会員分会 出原隆俊

以前、大阪大学に在籍していた時に、「平和学」の講義の一端を担当した。日本の近現代文学が、戦争とどのようにかかわったかを述べた。その中で、林芙美子が従軍作家として参加し、国威発揚を担う『北岸部隊』を書いたことに触れた。「私は戦争の崇高な美しさにうたれた」、「一抹の不安な影すら兵隊は払いのけて、逞しく前進しているのだ。どの兵隊の顔も光輝ある故郷を持つ落ちつきが、若い眉宇にただようている」という、あまりにも典型的な軍人賛美が記されている一方で、戦死した中国兵に「冷酷なよそよそしさを感じ」ていたが、その軍隊手帖の裏に若い女性の写真が張り付けられているのを見つけ、「私は乾いたような野菊の花を四五本摘んでその将校の横顔の上へ置いておいた」という行動をとる。生な体験が戦争の悪を捕らえさせたと指摘した。林芙美子は、戦後に「このばかげた怖ろしい戦争」、「永久に…私はいまになって、この戦争のおかげで、ひどい痛手を受けたような気がします。永久に戦争なんてないことを祈りますわ…」と語る人物を登場させるようになる(『うず潮』)。この変貌は井上ひさしも注目している。

この講義のレポートである学生が、ベストセラーとなり映画化もされた百田尚樹の『永遠の0』を反戦文学ではないかと記していた。この作品は巧妙に仕組まれたものである。全体として、戦争を批判する者の視点を意識し、若者が戦争体験者の証言を聞くという枠組み(本来は戦争の悲惨さを聞き取り語り継ぐための真摯な活動)を反転利用し、戦争批判を回避させる。また、「妻のために死にたくないのです」という、単純な戦争賛美の枠組みからは厭戦気分と見えるような飛行兵を登場させる。ぎりぎりの程度で軍隊を批判したり、天皇のためという枠組みにも捕らわれていないようにも見える部分もある。合理主義的思考の側面を持つ兵士の姿を、学生が「反戦文学」と誤読したのも無理はない。

しかし、戦争にかかわる小説は地上戦を扱うものがほと

んどである。そこには中国にいた日本兵が夜中に赤ん坊の泣き声でいらいらしてその子供を殺す(石川達三の『生きている兵隊』は、従軍作家の作品でありながらすぐに発禁とされたもので、作品を〈自虐史観〉に利用されるものだとする立場からの批判があるが、火野葦平の『土と兵隊』にも共通した場面がある)という実態が記され、日本兵による中国女性強姦を描く作品は枚挙にいとまがない(近年、軍医総監など政府高官になった森鷗外が、日本人の新聞記者が中国女性を強姦し殺害した場面を描く『鼠坂』が注目されるようになっていく)。飛行機による空中戦はそうした場面とは無縁である。百田は地上戦での実態を回避したのではないかと。

「泣き言一つ言わず、与えられた任務を務めました。後に神風特攻隊の人たちも自らの運命を受け入れて…」と語る人物や、「戦後の民主主義と繁栄は、日本人から「道徳」を奪った」と考える人物を登場させるなど、ある程度の認識がある世代からは著者の狙いは露骨なのだが、それが若い世代には読み取れない仕掛けとなっている。

「新聞記者だと—あんたは死にいく者が、乱れる心を押さえに押さえ、残されたわずかな時間に、家族に向けて書いた文章の本当の心の内を読み取れないのか」涙を流して語る武田に、高山は口元に冷やかな笑みを浮かべた。「私は書かれた文章をそのまま受け取ります。…」などと朝日新聞記者を想起させる人物を小説の常道を無視してまで、あまりに軽薄に描くことなども著者の立ち位置を明白に示している。

一方で芥川龍之介の『將軍』は乃木大将を容易に連想できる人物がある中国人をスパイだと断定して斬首を命じる、その「モノメニアの光」を指摘する。それは梅崎春生の『桜島』での「私は吉良兵曹長の顔をじっと見つめていた。無表情な頬に、何か笑いに似たものが浮んだ。ぞっと身をすくませるような、残忍な笑いだった。(略)軍人以外の人間には絶対に見られない、あの不気味なまなざしは何だろう。奥底に、マニヤックな光をたたえている。常人の眼ではない。変質者の瞳だ。」と重なる。

漱石の『趣味の遺伝』は日露戦争で悲惨な死を遂げる青

年を描き、『三四郎』は「いくら日露戦争に勝って、一等国になってもだめですね」、「しかしこれからは日本もだんだん発展するでしょう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、「滅びるね」と言った。——熊本でこんなことを口に出せば、すぐなぐられる。悪くすると国賊取り扱いにされる」など『坂の上の雲』のような歴史観をあらかじめ否定しておくかの趣がある。

百田尚樹も歴史修正主義者たちも、まっとうな戦争文学を読もうとはしないのだろう。近頃「天皇への信仰よりも任務を優先」、「なんとしても生き延びろ」と異質な教育が叩き込まれていた」とする陸軍中野学校を賛美する出版物がネット上で宣伝されているが、それと『永遠の0』との類似性は偶然なのだろうか。

安倍元首相が凶弾に倒れる

—その後の大きな展開

個人会員分会 水原渉

7月8日、安倍元首相が凶弾に倒れた時、思い出したのは……。2015年の湯川遥菜、後藤健二両氏のISによる殺害。安倍首相（当時）は中東歴訪中に「ISの脅威を食い止めるため」イラクなどに2億ドルの支援表明をした（同年01.17）、これが敵対的行為とされ殺害された。

もう一つは2016年、バングラデシュ、ダッカでの料理店襲撃事件。ジャイカ関係の日本人が食事中で、銃声の中で「アイム・ジャパニーズ、ドント・シュート」と男性が叫んだとの証言がある。平和国家日本に誇りを持ち、相手も理解しているはずと信じての懇願だったと思う。しかし、日本は、イスラム過激派には米国中心の反IS勢力の一員となっていた。日本人7人が犠牲になった。森友事件の際の赤木俊夫氏の自死も……。

○ 安倍首相殺害事件と結びつく自民党政治の大問題

安倍氏殺害事件後、統一協会の靈感商法・献金などの社会問題が改めて国民の前に曝けだされ、同協会と自民党議員との癒着という政治問題も大きく浮き彫りになっている。

1) 統一協会の靈感商法、献金などの社会問題

同協会は、朝鮮半島のキリスト教の土壤（信者は全人口の3割）の上に、文鮮明氏により創設された（韓国1954年、日本1959年）。1968年、国際勝共連合（韓国）、日本国際勝共連合が設立され、岸信介元首相が連合に参加し

た。岸氏は笹川亮一氏から文鮮明氏を紹介された。岸・笹川両氏は、反共産主義の信条を持つA級戦犯の右翼政治家だ。岸氏は同じ価値観の文氏と意気投合したという経緯がある。

同協会は1970、80年代に非キリスト教化し、靈感商法に傾いていった。「高麗人参は血を清める」、「壺は霊界を解放する」などの高額の「霊的付加価値」をつけて飛躍的に伸びていった。

「日韓併合の罪滅ぼしのために日本人は韓国に貢献せよ」との教義の下で、日本人にだけ収奪行為を行っている（靈感商法は、献金とは異なり、信者が外部の人に対して行う）。知られている被害状況は1987年から2021年の間で被害者約3万5千人、被害額約1237億円で、同協会の資金の7割ほどが日本からのものと言われている。

被害額も含む巨額の資金を原資とし、世界的に企業買収・活動をし、大規模のイベントなどを開催している（合同結婚式も「結婚信者」からの収奪の機会）。

2) 統一協会と自民党議員の癒着という政治問題

この様な犯罪的な組織が、全国8万～10万票とされる組織票に加え、選挙の際の実働部隊として、自民党の候補者を支援する。信者には選挙活動も宗教活動で、無報酬で熱心に働く。自民党議員は同協会の各種催しに顔を出し、スピーチを行い自分を売る。これで同協会は自らの活動に政治家のお墨付きを得て自己宣伝に利用、という構図が出来上がった。

多くの自民党議員がこの関係にあることが明らかになってきた。1976年の衆院選の時、議員の方に「共産主義から日本を守るため、支援したい」と働きかけてきたと言う証言もあり、この頃から両者の関係が強まっていった。

06年から安倍氏が同協会に対し積極的姿勢を見せ、自民党議員も堂々と関係を結ぶようになった。国際勝共連合の月刊誌『世界思想』表紙には、安倍氏の写真が何度も使われている（『世界思想』は世界思想社教学社の同名PR誌とは別個のもの）。故安倍氏の罪は深い。

現在、大手マスコミの報道不作為が育てたとも言える闇の世界が国民の目に晒されている。この問題も含め日本の大掃除が必要だ。自分も総選挙不可避といった状況を作りだすことも視野に入れ、岸田政権を追い込んでいくよう、頑張っていきたい。科学者会議にとって、科学的に物事を考える日本人を育てていくことも大切だ。